

## 海外大学との効果的なオンラインプログラム実施に関する考察

—国立六大学と AUN とのプログラムを事例として—

稲森 岳央

**A Study on the Effective Implementation of Online Programs with Foreign Universities:**

**The Case of the online program between the Six National Universities and AUN**

**Takao INAMORI**

### 要旨

本研究は、令和 4 年 10 月、国立六大学連携コンソーシアム（千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学、熊本大学）とアセアン大学ネットワーク（AUN: ASEAN University Network）加盟大学の学生に対して実施された、「過疎化・地方再生」をテーマとしたオンラインプログラムを事例とし、効果的なオンラインプログラムの方法について考察したものである。一般的に、参加費がかからないプログラム、参加者間の語学レベルに大きな差がある場合、辞退者が多く出たり、満足度が低いプログラムになりがちである。しかし、本研究を通じて、①参加者の興味関心高いトピック、②日本人学生にとってアドバンテージがあるトピック、③グラウンドルールを設定することで、効果的なグループワークと深い学びのあるプログラム運営が実施できることが明らかになった。

**キーワード：**オンラインプログラム、国際交流、グループワーク、グラウンドルール

### 1. はじめに

2014 年に始まったスーパーグローバル大学創生支援事業（SGU）により、各採択大学は独自の構想により国際化を推進してきた。しかしながら、2019 年に発生した新型コロナウイルス感染症の影響により、学生の派遣と受入は事実上不可能となった。これらの状況に対応するため、オンラインで日本と海外の学生をつなぎ、協働、共修するプログラム COIL（Collaborative Online International Learning）型教育が注目を浴び始めた。COIL 型教育は、経済的な負担、時間的な拘束を大きく受けることなく、異文化コミュニケーション、多文化共生の学び、語学力向上をさせることが可能である（池田, 2020）。このような背景の中、千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学、熊本大学で構成される国立六大学連携コンソーシアムとアセアン大学ネットワーク（ASEAN University Network 以下、AUN）は、2021 年度からオンラインによる交流プログラムを開始した。

なお、本研究で扱うオンラインプログラムは、海外の大学生と共同で問題解決を行

う PBL (Project Based Learning) 型学習を採用したが、正課内教育の一環として行う COIL 型プログラム (O'Dwod, 2017) ではなく、学期期間中に任意参加で行うオンラインプログラムとして実施された。

## 2. 国立六大学連携コンソーシアムと AUN の交流

国立六大学連携コンソーシアム (以下、国立六大学) は、旧六医大である千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学及び熊本大学が、教育・学術研究・社会貢献等の機能を一層強化し、グローバル社会をリードする人材育成の推進と学術研究を高度化することを目的として、2013 年 3 月に設立された (国立六大学連携コンソーシアム, 2022)。

AUN は、1992 年第 4 回 ASEAN サミットで提案され、1995 年設立された国際大学連合である (首藤, 2015)。世界各地域と学生や研究者交流、共同研究を積極的に実施し、地域内の人材育成開発に取り組んでいる。AUN を核とした ASEAN+3 University Network (AUN 加盟大学に日本 10 大学、中国 5 大学、韓国 6 大学の合計 3 カ国 21 大学を加えたネットワーク) には、2022 年12月現在、51 大学が加盟している (AUN, 2022)。

2013 年、国立六大学と AUN は、さらなる国際化とアセアン諸国との学生交流の活性化を目指し、MOU および学生交流協定を締結し、学生交流を開始した。2014 年からは、夏季の派遣プログラムが開始され、2019 年度までに 92 名を派遣している。同様に受入プログラムも実施されていたが、受入を推奨するための奨学金を確保することが難しくなり、2017 年度以降、実施されていない。

国立六大学と AUN の学生交流は、コロナ禍の影響により、2020 年度は途絶える結果となった。この学生交流の停滞を打開するため、2021 年 10 月、本学が推進する SDGs をテーマとした日本-ASEAN SDGs 研修コース「日本の文化と生物多様性をユネスコエコパークから学ぶ」(主催金沢大学) を 5 日間 (オンライン講義・交流 2 回とオンデマンド講座 3 本で構成) 実施。2022 年 3 月には AUN と国立六大学の共催で異文化交流プログラム「ASEAN-Japan Virtual Cultural Exchange Programme 2022」をオンラインで 3 日間実施した。Virtual と名付けた通り、ZOOM に加え、アバターを使用してコミュニケーションができる Gather Town をプラットフォームとして利用し、深い学びと交流を実現することができた。一方、本プログラムで出席率 75% を満たした修了者は、全参加者 64 名中 32 名 (修了率 50%)。国立六大学からは 34 人中 21 人が修了 (修了率 61.8%)、13 人が未修了となった。

全体の修了率からすると国立六大学の修了率は高かったが、初日のアイスブレイクの時点で語学力を理由に辞退を申し出る日本人学生、また、英語による活発な議論や交流に参加できずに、参加が滞ってくる日本人学生も見られた。このため、2022 年度のプログラムでは、参加率、修了率をいかに向上させるかという点に、焦点を当てプログラムデザインを行うこととした。

### 3. プログラム内容

2022年度のプログラムは、岡山大学が担当することとなり、2022年10月11日～14日までの四日間、オンラインプログラムを実施することとなった。参加学生の定員は65人。割り当てはAUN加盟大学の学生に50人、国立六大学の学生に15人とし、日本の事例を用いて、ASEAN地域の学生に学んでもらい、国立六大学の学生が日本に関する情報ソースとして活躍できる設定とした。プログラムの詳細は、以下のような流れでデザインされた。

#### 3.1. テーマ

テーマは、岡山県の過疎化、地方再生について学んでもらう内容とした。当初、派遣担当教員による「日本に関連するオムニバス講義」等も検討されたが、より深く学んでもらうために「視覚的に学ぶ教材が必要」という結論に至った。これにより、本学が既に複数作成していた英語字幕付きのSDGsをテーマとした学習用動画を利用することとなった。自然環境、茶道、禅等複数ある動画教材から、最も興味関心が高いと思われる地方再生、過疎化に関する動画を選択し、本プログラムのテーマとした。



写真1：学習用動画「官民協働による歴史ある街づくりー矢掛町」のスクリーンショット

本動画は、①導入、②課題、③インタビューと英語字幕が入った3本の動画で構成され、自主学習ができる内容となっている。

### 3.2. プログラムの目的

このプログラムの目的は、過疎化に関する講義を受講後、グループワークを通じて「岡山もしくはそれ以外の過疎化地域（国）を選び、課題を分析し、解決策を策定する」というものである。これは、これまでのオンラインプログラムのアンケート結果から、参加学生はオンライン講義よりも、海外の学生との交流や共修を期待しているということ把握していたためである。

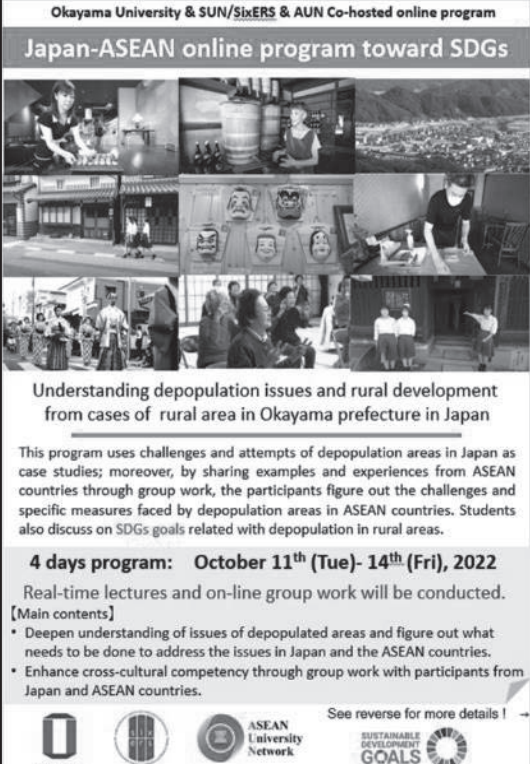
### 3.3. プログラムの構成

プログラムは 4 日間で構成され、初日に開講式、オリエンテーションと岡山県の過疎化に関する同期型授業の実施。加えて、過疎化、地方再生に関する自己学習用動画を視聴し課題として提出。2～3 日目は、10～15 分程度、レビューと導入を兼ねた同期型授業実施後、グループワークを行い、過疎化に関する情報収集、分析、解決策の策定を行わせることとした。グループワークでは、「政府の支援」、「企業の誘致」といった安易な解決策ではなく、「どのようにすれば、政府の支援が受けられるのか?」、「どのようにすれば企業誘致ができるのか?」まで考えることを課した。また、グループワーク時、担当教員がブレイクアウトルームの巡回、メインルームでの質疑応答による学習支援。最終日 4 日目、閉校式と各グループ 5 分間のプレゼンテーションを実施することとした（図 1）。また、任意参加で最終日のプログラム終了後、各国の特色ある食事を持ち寄り、食事をしながら交流をする場（Cross-cultural meal）を設けた。

### 3.4 グラウンドルールの設定

2022 年 3 月に実施したプログラムでは、議論にうまく参加できない日本人学生が、そのまま取り残されている状況を目にした。また、英語力の低さを理由に初日に辞退を申し出た学生もいた。よって、本プログラムではそのような状況を避けるために、グラウンドルールを設定した。グラウンドルールとは、ワークショップや研修を実施する際に、スムーズな進行をするための約束事である。このプログラムで設定したのは以下の 7 つである。

- A) お互いを尊重すること
- B) グループワーク時、ファシリテーターを選び、議論・タスクを取りまとめること
- C) ファシリテーターは、議論に参加していない参加者から積極的に意見を求めること
- D) 「だれ一人取り残さない」(Leave no one behind) は SDGs の重要な理念であることを忘れないこと
- E) 平易な英語を極力使うこと
- F) WEB カメラは常時入れておくこと



**Okayama University & SUN/SixERS & AUN Co-hosted online program**

**Japan-ASEAN online program toward SDGs**

Understanding depopulation issues and rural development from cases of rural area in Okayama prefecture in Japan

This program uses challenges and attempts of depopulation areas in Japan as case studies; moreover, by sharing examples and experiences from ASEAN countries through group work, the participants figure out the challenges and specific measures faced by depopulation areas in ASEAN countries. Students also discuss on SDGs goals related with depopulation in rural areas.

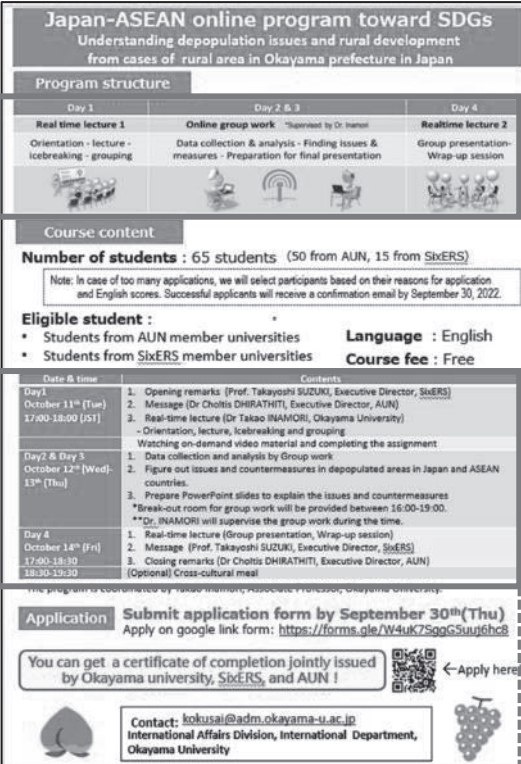
**4 days program: October 11<sup>th</sup> (Tue)- 14<sup>th</sup> (Fri), 2022**

Real-time lectures and on-line group work will be conducted.

**[Main contents]**

- Deepen understanding of issues of depopulated areas and figure out what needs to be done to address the issues in Japan and the ASEAN countries.
- Enhance cross-cultural competency through group work with participants from Japan and ASEAN countries.

See reverse for more details!



**Japan-ASEAN online program toward SDGs**

Understanding depopulation issues and rural development from cases of rural area in Okayama prefecture in Japan

**Program structure**

Day 1	Day 2 & 3	Day 4
<b>Real time lecture 1</b>	<b>Online group work</b> *Supervised by Dr. Inamori	<b>Realtime lecture 2</b>
Orientation - lecture - icebreaking - grouping	Data collection & analysis - Finding issues & measures - Preparation for final presentation	Group presentation- Wrap-up session

**Course content**

**Number of students : 65 students (50 from AUN, 15 from SixERS)**

Note: In case of too many applications, we will select participants based on their reasons for application and English scores. Successful applicants will receive a confirmation email by September 30, 2022.

**Eligible student :**

- Students from AUN member universities
- Students from SixERS member universities

**Language : English**  
**Course fee : Free**

Date & time	Contents
Day1 October 11 <sup>th</sup> (Tue) 17:00-18:00 (JST)	1. Opening remarks (Prof. Takayoshi SUZUKI, Executive Director, SixERS) 2. Message (Dr Choltis DHIRATHITI, Executive Director, AUN) 3. Real-time lecture (Dr Takao INAMORI, Okayama University) - Orientation, lecture, Icebreaking and grouping Watching on-demand video material and completing the assignment
Day2 & Day 3 October 12 <sup>th</sup> (Wed)- 13 <sup>th</sup> (Thur)	1. Data collection and analysis by Group work 2. Figure out issues and countermeasures in depopulated areas in Japan and ASEAN countries. 3. Prepare PowerPoint slides to explain the issues and countermeasures *Break-out room for group work will be provided between 16:00-19:00. **Dr. INAMORI will supervise the group work during the time.
Day 4 October 14 <sup>th</sup> (Fri) 17:00-18:30 18:30-19:30	1. Real-time lecture (Group presentation, Wrap-up session) 2. Message (Prof. Takayoshi SUZUKI, Executive Director, SixERS) 3. Closing remarks (Dr Choltis DHIRATHITI, Executive Director, AUN) (Optional) Cross-cultural meal

**Application** Submit application form by September 30<sup>th</sup> (Thu)  
Apply on google link form: <https://forms.gle/W4uK7SggG5uuj6hc8>

You can get a certificate of completion jointly issued by Okayama university, SixERS, and AUN!

Contact: [kokusai@adm.okayama-u.ac.jp](mailto:kokusai@adm.okayama-u.ac.jp)  
International Affairs Division, International Department, Okayama University

プログラム構成

**Program structure**

Day 1	Day 2 & 3	Day 4
<b>Real time lecture 1</b>	<b>Online group work</b> *Supervised by Dr. Inamori	<b>Realtime lecture 2</b>
Orientation - lecture - icebreaking - grouping	Data collection & analysis - Finding issues & measures - Preparation for final presentation	Group presentation- Wrap-up session

Date & time	Contents
Day1 October 11 <sup>th</sup> (Tue) 17:00-18:00 (JST)	1. Opening remarks (Dr Choltis DHIRATHITI, Executive Director, AUN) 2. Message (Prof. Takahoshi SUZUKI, Executive Director, SixERS) 3. Real-time lecture (Dr Takao INAMORI, Okayama University) - Orientation, lecture, Icebreaking and grouping Watching on-demand video material and completing the assignment
Day2 & Day 3 October 12 <sup>th</sup> (Wed)- 13 <sup>th</sup> (Thur)	1. Data collection and analysis by Group work 2. Figure out issues and countermeasures in depopulated areas in Japan and ASEAN countries. 3. Prepare PowerPoint slides to explain the issues and countermeasures *Break-out room for group work will be provided between 16:00-19:00. **Dr. INAMORI will supervise the group work during the time.
Day 4 October 14 <sup>th</sup> (Fri) 17:00-18:30 18:30-19:30	1. Real-time lecture (Group presentation, Wrap-up session) 2. Message (Dr Choltis DHIRATHITI, Executive Director, AUN) 3. Closing remarks (Prof. Takahoshi SUZUKI, Executive Director, SixERS) (Optional) Cross-cultural meal

図1 プログラムフライヤーとプログラム構成

#### 4. 応募者の所属と選考結果

参加を呼び掛けるための広報は、AUN事務局を通じ、AUN加盟30大学に対して行われた。400名近くの応募があった2021年度の経験に基づき、SNS等を利用した広報活動は行わなかった。しかしながら、AUN側からは133名の応募があった。

応募者の内訳は、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学、フィリピンのマレーシア国民大学、ベトナム国家大学、シンガポールマネジメント大学、シンガポール国立大学で、約8割を占めた。その後、志望動機を確認し、78名を合格者（内、国立六大学は11名）とした。募集定員の65名を超えて採用したのは、無料オンラインプログラムで起こりがちなキャンセル、不参加者を想定したためである。合格した78名の内訳は、アテネオ・デ・マニラ大学、マレーシア国民大学、シンガポールマネジメント大学で約7割を占めた。選考に際しては、当初、語学力を選考の基準として採用する予定であったが英語ネイティブとしてスコアを提示しないケースも多く、基準として除外した。

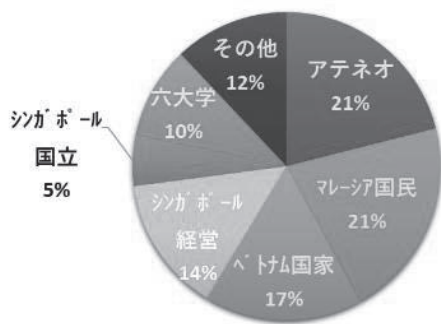


図2 申込者内訳 (N=133)

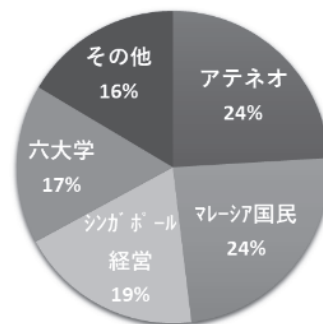


図3 合格者内訳 (n=78)

#### 5. グループの構成

プログラムの実施に際して、グループ分けを行った。活発な議論とグループワークが行える環境づくりのため、5名程度のグループを計画していたが、最終日のプレゼンテーションの進行を考え、10グループ（各グループ7～8名）で実施することとした。

グループを分ける際は、参加者ができるだけ多様になるように、同じ大学の学生が固まらないように配慮した。また、国立六大学の学生に関しては、語学力の高い学生と低い学生を同じグループにしないようにした。これは過去の経験から、語学力の高い日本人学生がいた場合、語学力の低い学生が静かになってしまう可能性が高いと判断したためである。なお、日本人学生のCEFRのレンジはB1からC1であったが、B1とB2が多かった。

## 6. 結果と評価

プログラム終了後、4日間で3日間参加した学生を修了者とし、修了書を発行した。本プログラムの未修了者、辞退者は少なく、修了率が高いオンラインプログラムとなった（表1）。全体では、修了率は75.6%。初日に参加した学生のみを対象とした場合の修了率は93.7%であった。国立六大学からの参加学生に関しては、初日に参加しなかった学生1名を除き、全員が修了した。

表1 参加者数と修了率

項目	全体	国立六大学
合格者	78名	11名
初日参加 <sup>注)</sup>	63名	10名
修了者	59名	10名
未修了者（途中辞退者1名を含む）	19名	1名
修了率 a（修了者数／合格者数）	75.6%	90.9%
修了率 b（修了者数／初日参加者）	93.7%	100.0%

注) 動画視聴による補講参加学生 3名を含む

プログラム終了後、アンケートを実施した結果、参加者の内48名からフィードバックがあった。初日に参加した63名を母数とした回答率は76.2%。テーマ「岡山の過疎化と地方再生」を通じて少子化や人口減少について理解を深めたか？という問いに関しては、全員が肯定的（「とてもそう思う」および「そう思う」）な意見を選んだ（図4）。また、グループワークを通じた学びについても、9割以上が肯定的な意見を述べた（図5）。

グループワークは、一部にタスクが集中したり、不公平感が生まれやすくなることもあるため、「個々のタスクを明確にする」ことを指導したが、グループワーク時の負荷に関して意見が分かれた（図6）。出身大学を確認したところ、普段からグループワークを多くしていると思われるシンガポールマネジメント大学の学生は、全員が「あまりそう思わない」もしくは「全くそう思わない」と回答した。一方、日本人学生は、全員が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した。グループワークを通じて実施した最終日のプレゼンテーションの満足度に関しては、84%が「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答し、満足度が高い傾向がみられた（図7）。

最後に参加しやすいプログラム実施時期と時間帯について質問したところ、肯定的な意見（「とてもそう思う」および「そう思う」）がそれぞれ、54%（図8）、58%（図9）であった。アカデミックカレンダーや、授業の時間割は、各大学、各々の学生によって異なるため、実施時期と時間帯の設定が難しかったが、最も参加しやすいと思われる日程と時間帯を選び実施する結果となった。

その他、自由記述のコメント欄を設けたが、全体的にプログラムに対して肯定的なものが多かった。一方で、少数ではあったが、グループワーク時の意見の衝突、講義とグループワークの割合に関する提案、週末や休暇時開催の提案等の意見もあった。

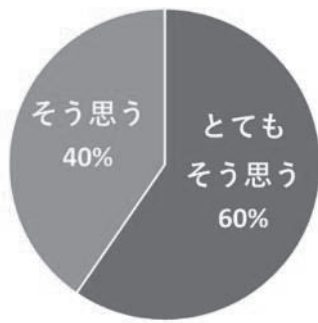


図4 人口減少の問題について理解を深めた (n=48)

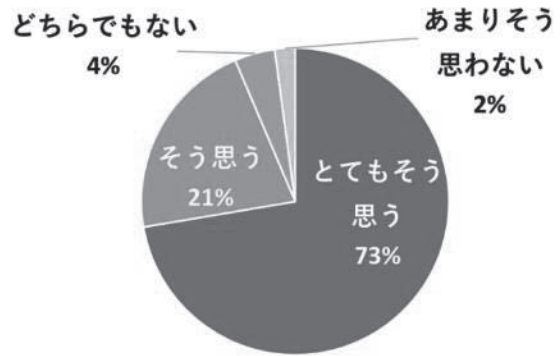


図5 講義やグループワークを通じて新しいことを学んだ (n=48)

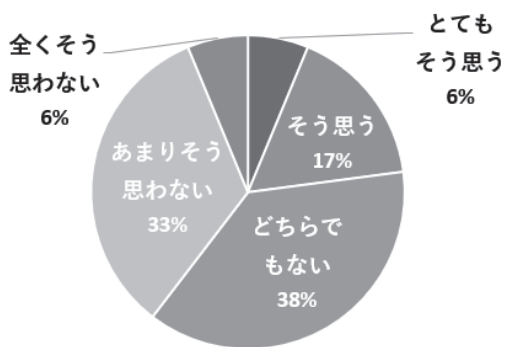


図6 グループワークは大変だった (n=48)

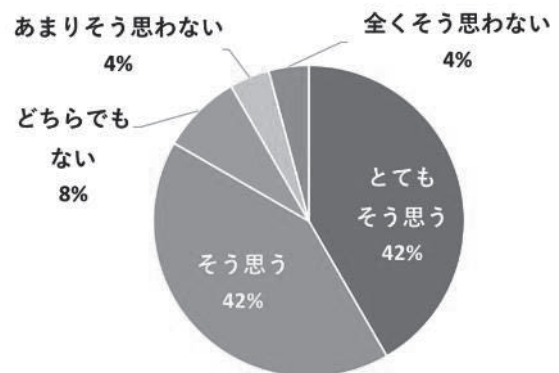


図7 自分たちのプレゼンに満足している (n=48)

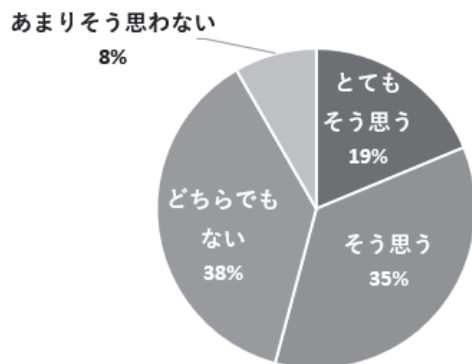


図8 10月初旬のオンライン講座は参加しやすい (n=48)

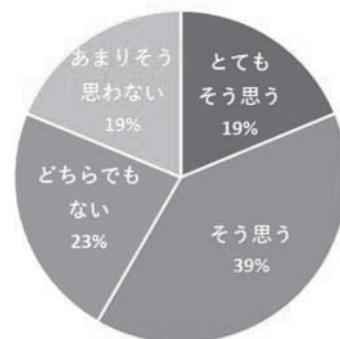


図9 16~19時 (JST) の時間は参加しやすい (n=48)



## 7. 考察

本プログラムは、岡山や日本の過疎化、地域再生をテーマとして学びつつ、日本人のプログラム修了率を向上させるをことに焦点をあてプログラムのデザインを行った。その結果、AUN加盟大学の学生および国立六大学の学生ともに、満足度が高く、修了率が高い結果となった。その理由について、プログラム終了後、参加学生に対して個別に行ったフォローアップ調査（6名）の結果等を含めて考察をした。

### 7.1. 修了率や満足度が高かった理由

これらは参加学生のモチベーションが最後まで継続したことが影響したと推測した。参加費用は無料であるため、途中で参加を止めても無駄な支出は生じない。このため、一般的に参加無料のオンラインプログラムでは、当日のキャンセル多かったり、修了率が低くなる傾向が、過去の経験からも分かっている。

しかしながら、今回は、プログラムのテーマが、①参加学生にとって興味深い内容であったこと、②初日から形成したグループ活動が順調に進んだことが、参加学生のモチベーションにプラスの影響を与えたと判断した。これらの活動通じて得られる知識と経験、加えて、③国立六大学とAUNが発行する修了証も少なからず、参加学生のモチベーションに影響を与えたと考える。

マレーシアに関しては、学期間で授業がない時期であったことが分かっているが、それ以外は、学期期間中であり、授業や課外活動がある中での開催となった。今回特徴的だったのは、事前に遅刻や早退の連絡をして、授業や所用の合間を縫って、参加する学生が多かったという点である。そのような多忙な中、最終発表に向け、グループメンバーとともに成果品である発表用スライドづくりに取り組んだ。グループワーク時も、各々のタスクを明確にして、黙々と作業をしている様子が見られた。

①のテーマあるが、予備知識がなくても入りやすいテーマであり、議論がしやすいことが影響していたようである。シンガポールや日本のように少子化の問題が明確になっている国もあるが、フィリピンやマレーシアのように、それらがあまり顕在化していない国もある。しかし、ライブ授業や学習用動画、参加学生が提供する情報をもとに、議論をすることが容易となった。

さらに、日本人学生にとっては、同期型授業や学習用動画で取り扱っている情報が岡山や日本であったため、「地の利」を生かした議論が可能となった。最終発表で扱う過疎化の地域は、岡山以外、どの地域でも可能としたが、最終的に岡山や日本を選ぶグループが多かった（表2および写真2）。10グループ中7グループが、日本の過疎地を選び、4グループは岡山や岡山県矢掛町を選び、過疎化に関する情報を収集、分析、解決策の策定を行った。

表2 グループワークに選択した過疎化地域（国）

グループ番号	過疎化地域（国）名
1	新潟県
2	タイ
3	熊本県山鹿市
4	マレーシア・パパン <sup>注)</sup>
5	岡山県
6	岡山県矢掛町
7	秋田県
8	岡山県矢掛町
9	岡山県矢掛町
10	シンガポール

注) かつて鉱業で栄え、現在は過疎の町として有名となったペラ州の町



写真2 最終日プレゼンテーション

## 7.2. グラウンドルールの効果

語学力が弱い日本人学生を念頭に設定したグラウンドルールであるが、少数ながら「他人の意見を尊重しないメンバーがいた」、「語学レベルがバラバラで、意見を求めてもうまく回答できない参加学生がいた」という意見もあり、プラスに影響しなかったという解釈もできる。しかしながら、多くの参加学生がグループ活動やプレゼンテーションに満足したこと、WEBカメラをオフにすることなく積極的に参加していたこと、B1レベルの日本人学生が、プログラムに満足し、ネイティブレベルが多かったグループの中で、苦勞しながらも、注意深く相手の発言を聞き、明確に発言するように

努めた結果、「前より英語を話すことが恥ずかしくなくなった」とコメントをしたことから分かるように、グラウンドルールが、効果的なグループワークに貢献したと解釈できると考える。上記のネガティブなコメントも、「グラウンドルールがあるのに他人の意見を尊重しなかった」、「グラウンドルールに従って意見を求めたが、うまくいかなかった」と、グラウンドルールをルールとして認めていたが故のコメントであろう。また、プログラム中の様子から、「グラウンドルールに従うことが正しい（望ましい）」という意識が、参加者間で共有されていたという判断した。

### 7.3. 効果的なオンラインプログラム実施のための工夫

COIL型プログラムの事例となるが、お茶の水大学（2022）では、「COILの成功に向けた工夫」として以下の項目を挙げている。

- A) 日本と海外の大学とで学生に同一の課題を課す
- B) 共同発表・準備など、学生が共同で行う作業を課す
- C) 発表や意見交換の際に、日本と海外混合の小グループを作る
- D) ウェブ上の掲示板、SNSなどを活用し、授業外で交流できる環境を作る
- E) オンライン通訳・翻訳機能を活用する
- F) 時差がある場合は、同期型授業ではなく、オンデマンドの動画を使用したり、SNSなどテキストで意見交換したりする
- G) グループ討議に、学生のファシリテーターを割り当てる

今回実施したオンラインプログラムでは、D)を除き、すべての項目を満たした活動を行った。一方、D)に関しては、今後、改善が求められる項目である。多くの参加学生は、ICTスキルが高いと判断し、グループワーク用のプラットフォームとしてZOOMを一日3時間程度開放したが、そのほかのツール（Googleドライブ、Canva等）については特に指定しなかったが、フォローアップ調査の際、参加学生から「プログラム時間外に自由に交流できる環境が欲しかった」というコメントがあった。グループ内ではオンラインでファイルを作成、編集する場を作り、Instagramで連絡する環境を作ったものの、他のグループと交流する場を構築するのは困難である。主催者側は参加学生のICTスキルを過信したため、結果として、他のグループと交流する場は最終日のCross-cultural mealのみとなってしまった。このため、多くの学生と交流する場を期待していた参加学生にとっては、期待外れなプログラムとなってしまった。F)に関しては、同期型授業および同期型グループワークがメインとなったが、参加者は時差が1～2時間程度の東南アジアと日本の学生であるため、それほど大きな影響はなかったと思われる。E)については、特に指導はしていなかったが、オンライン翻訳サイト等も利用して、理解を深めたり、円滑なコミュニケーションを図っていたようで

ある。池田（2018）は、COIL 型プログラムを事例として、オンラインによる共修プログラムの目的は、英語を学ぶことでなく、協力してプロジェクトを成功させることにあり、必要に応じて翻訳ツールをしてでも意思疎通をすべきであると述べている。

上記のアプローチ以外にも、「参加準備の一環として国立六大学の学生（難しい場合は、同じ大学の学生）だけで、一度集まるべき」、「プレゼンテーション時間は、しっかりと管理しないと不公平」といったプログラム運営に関する有意義なコメントもあった。学生と教員の事前準備に関しては、COIL 型プログラムを事例として田中（2022）も、その重要性について考察している。

## 8. まとめ

本プログラム実施にあたっては十分な準備が求められるが、実際には時間、投入できるリソースともに非常に限定された状況での企画・運営となった。しかしながら、既存の学習用動画、授業で使用している既存スライドを再編集することで、4 日間のオンラインプログラムの教材を準備することができた。新たに購入を必要とする資機材もなく、投入した人的リソース以外は、ほぼゼロでのプログラム実施となった。一方、改善点はあるものの参加学生の満足度は概して高く、深い学びのあるプログラムであったという結果が得られた。何よりも、AUN からの参加学生、国立六大学の学生を含め、プログラムの修了率が高かったことが、課外活動外で実施したプログラムとしては、特記すべき点であったと考える。

令和 4 年度の国立六大学と AUN のプログラムに関しては、日本から派遣するプログラムについては、実渡航が計画されているが、東南アジアからの受入プログラムについては、継続してオンラインプログラムの実施が検討されている。これは、所得が低い ASEAN 諸国の学生の参加は、奨学金の確保なしに実現が難しいこと、また、実渡航を伴う受入プログラムを運営するだけの人的リソースが、国立六大学側にないためである。しかしながら、この状況を悲観的にとらえるのではなく、今回のプログラム以上に学びがあり、AUN 加盟大学からの参加学生と国立六大学からの参加学生の交流が深まるプログラム実施に向けて準備を開始したい。そして、アンケートで複数名の学生がコメントしたように、オンラインプログラムを通じて、相手の国について興味関心を持った後、いつかお互いの国を訪問し、さらに親交を深めていってほしい。

## 謝辞

本プログラムを実施するにあたっては、毛利貴美准教授（岡山大学）が作成した学習用動画教材の提供を受けた。また、プログラム実施中は、Khalmirzaeva Saida 准教授（岡山大学）のサポートを受けプログラムを運営した。また、プログラムの企画運営等においては、国際部国際企画課の高橋志緒里職員の支援により円滑なプログラム実施が可能になった。この場を借りて感謝申し上げます。

## 引用文献

- 池田 佳子 (2018) オンライン国際連携学習 COIL で「生きた学び」を实践. アルクグローバル通信 (2018年11月). <https://www.alc-education.co.jp/ag-tsusin/201811/g-1.html> (Retrieved on January 13, 2023).
- 池田 佳子 (2020) ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習「COIL」の教育効果と課題 (特集 授業の価値を最大化する教育の ICT 革新). 大学教育と情報, 9, 20-25.
- お茶の水大学 (2022) COIL 導入に向けて.  
<https://www.cf.ocha.ac.jp/coil/j/menu/about/index.html> (Retrieved on January 13, 2023).
- 国立六大学連携コンソーシアム (2022) 設立の理念. <https://sixers.jp/philosophy/> (Retrieved on January 13, 2023).
- 首藤 もと子 (2015) ASEAN 社会文化共同体に向けて-現状と課題-. 国際問題 2015年11月, 646, 25-36.
- 田中 直樹 (2022) 次世代の学び・国際共同オンライン学習 (COIL). 信州医誌, 70(3), 1195-197.
- AUN (2022) Membership. <https://www.aunsec.org/discover-aun/membership> (Retrieved on January 13, 2023).
- O'Dowd, R. (2017) Virtual Exchange and internationalising the classroom. *Training Language and Culture*, 1(4), 8-24.